

奨励的研究助成予算「奨励的研究経費」成果報告書

研 究 者	所属学系 文学・芸術学系 氏 名 濫 澤 尚
研 究 課 題	南宋詩人・陸游の詩にみえる「菰」語について 一本草家としての観点から—
成 果 の 概 要	<p>いわゆる「江南半壁」の南宋期、その頑ななまでの抗戦論のゆえに官僚としては終生不遇であったが、詩名において高く、慷慨の志を吐露した詩から平穏な農村風景を活写した詩まで、きわめて多くをのこした詩人、それが陸游である。先行研究である</p> <p align="center">濫澤 尚「陸游と菰 —放翁詩作をめぐる本草学的考察—」 (『白川静先生追悼記念論文集』、2008)</p> <p>で考察した結果、長命であった陸游の生涯における最大の詩境変化は淳熙16年(1189)の免職時であった。詩集に拠って以降の詩数をかぞえると、6,461首におよび、これは現存詩数の約65%にあたる分量である。</p> <p>しかし、その変化を詩材「菰」に着目してみたとき、それは郷里の紹興に安居した淳熙7年の冬になるのではないか。この頃から農村の中に積極的に溶けこむばかりか、おのが田圃を躬耕しては、盛んにそれらを詩材とし始めたのである。</p> <p>ここで、陸游の菰草(マコモ)を詠じた詩110首を通覧すると、やはり帰郷以前の詩は少ない。このことは、彼の暮らした風土と無縁ではない。すなわち山陰鑑湖という温暖な気候と低湿な地形とは、ふたつながら菰草を群生せしめるに好適な環境なのであり、かつその菰草はおおいに食料を提供してくれるのであるから、いきおい詩に詠まざるを得なくなるのである。</p> <p>唐代詩における菰の用例はその全詩数に比してきわめて少なく、『全唐詩』5万首を通検してもその数30にも満たない。一方、宋代詩に目を転じては、楊万里16見が目立つ程度である。現存詩数の違いから単純な比較はできないものの、それでもあらためて陸游の菰詩の多さが知れよう。しかも、陸游詩には菰草を常食の対象とみなす特異な表現がきわめて多く、一般に詩語としては適当とはいえない詠いぶりが目につくのである。</p> <p>文人がただ名物を机上に弄玩するのではない、こうした詩人としての観察眼は、おそらく家学による。祖父陸佃は、実は植物名の多い『詩経』の解釈によって名高い学者であった。それは当然本草学に精通することを意味する。</p> <p>以上を要するに、陸游詩に菰草が頻出する背景には、①山陰紹興という住環境、②本草学的視点を有する家学、③瑣事を滋味豊かにつづる詩風があり、それらがあいまって出現したものではないか、との結論が得られるのである。単に菰草を水辺緑蔭の描写に使用するのではない陸游の詠菰詩は、彼にあって初めて表現し得た佳篇の数々なのである。</p> <p>今後はさらに、「陸游の本草学」のようなかたちで、これまでの研究成果とあわせてまとめたいと考えている。</p>